

## 日本海洋学会の活動紹介

日比谷 紀之\*

### 1. 事業概要

日本海洋学会は、海洋学の進歩普及を図ることを目的として1941年に設立されました（シンボルマークを第1図に示します）。

現在の会員数は約1,600名で、会長の日比谷紀之（東京大学）、副会長の神田穰太（東京海洋大学）を中心に、現在2名の監査、13名の幹事、56名の評議員で構成される役員体制の下、研究会・講演会の開催、学術的刊行物の発行、研究業績の表彰や研究の奨励などの事業を積極的に行っております。本稿では、日本気象学会の皆様にも、近年の日本海洋学会の主な活動をご紹介します。

### 2. 研究発表大会

日本海洋学会は、長年にわたって毎年、春季（東京近郊）・秋季（地方）の2回の研究発表大会を実施してきました。しかしながら、昨今の状況に鑑み、学会の国際化を図るだけでなく、地球惑星科学分野を始めとする学術の動向を確認することや、その中で海洋科学のプレゼンスを高めることの必要性を考慮し、春季大会を日本地球惑星科学連合（JpGU）大会に合流させる形で実施することになりました。実際、2017年度の春季大会を試験的にJpGU大会に合流させて実施したところ、地球惑星科学の広範な学術分野の中で海洋科学を俯瞰する機会を通じて、従来の日本海洋学会の活動範囲に囚われない発想や視点を得ることができただけでなく、活発で魅力ある日本海洋学会を他の分野にアピールすることができました。この成果を受け、今後も春季大会はJpGU大会に合流させて実施

することを総会において決定しました。JpGU大会に合流させたことがゴールではなく、JpGUに参加する他学会とも連携を深めることで、海洋科学のさらなる発展に向けたより良い春季大会になることを目指しています。

一方、本学会の単独開催となる秋季大会は、伝統ある学会活動の歴史を引き継ぐ本学会のホームグラウンド的な大会と位置付けております。メインである研究発表に「セッション提案制」を導入することで、若手研究者の自立とリーダーシップ能力の向上を図り、会員間の議論を通じて研究活動に活気を与え、分野を問わず海洋に関わることを全般を忌憚なく論じ合えるような研究大会を目指しております。提案されるセッションは、外洋から沿岸、湾内までの様々な空間スケールをカバーし、分野も海洋物理（海洋力学、海洋循環、大気海洋相互作用、気候変化・変動現象、乱流、潮汐など）、海洋化学（物質循環、二酸化炭素収支、海洋酸性化、炭酸カルシウム収支、栄養塩動態、低酸素化など）、海洋生物（浮遊生物群集動態、底生生物群集



第1図 日本海洋学会シンボルマーク

\* Toshiyuki HIBIYA, 日本海洋学会会長/東京大学大学院理学系研究科。

hibiya@eps.s.u-tokyo.ac.jp

動態、生物代謝、生態系変動など)、それら横断研究分野のセッションで構成されています。最近では海洋教育やアウトリーチ、多量データ管理などの研究発表もみられるようになってきました。

この他、特に海洋生物関連では、かねてより春季に行ってきた水産海洋学会、プランクトン学会などとの合同シンポジウムを継続して開催することで、関連学会との情報交換に基づく連携を積極的に進めています。

### 3. 刊行物の発行

日本海洋学会で最も代表的な定期刊行物は、Springer社から概ね年6回オンライン出版されている英文誌の「Journal of Oceanography (JO)」です。Springer社はShareable Linkを作成しており、誰でもウェブサイトにてJO掲載論文を閲覧することが可能です(PDF版は会員のみ利用可能)。また、著者の負担により、オープンアクセス論文とすることも可能です。JOは学会発足当時より継続して刊行されており、2017年度時点で73巻を数えます。2017年度のインパクトファクターは1.746となっており、海洋学に関する雑誌の中でも高い評価を受けております。和文誌「海の研究」も年6回オンライン出版されており、日本海洋学会ウェブサイトおよびJ-STAGEで、様々なジャンルの原著論文、総説、賞受賞記念論文を公開しています。さらに、紙媒体でもある「JOS ニュースレター」を年4回発行し、会員に送付している他、会員以外でもPDFのダウンロードができるよう、学会ウェブサイトにも掲載しています。ちなみに、本稿のエール交換(相互紹介)記事である「日本気象学会の活動紹介」はJOS ニュースレターVol.8 No.3(2018年11月発行)に掲載される予定です。その他、日本海洋学会の5つの研究会の1つである沿岸海洋研究会(次節参照)では「沿岸海洋研究(旧・沿岸海洋研究ノート)」を刊行しています。

これら定期刊行物以外にも、日本海洋学会の編集した書籍が出版されています。最近では、2017年7月に朝倉書店より「海の温暖化一変わりゆく海と人間活動の影響」が出版されました。また、長年利用されてきた気象庁の「海洋観測指針」に代わる最新の情報を提供するため、「海洋観測ガイドライン」を2015年以来刊行・更新し、学会ウェブサイトでも公開しています。

### 4. 様々な事業活動

日本海洋学会には、4つの委員会(広報委員会、将来構想委員会、海洋環境委員会、海洋観測ガイドライン編集委員会)、5つの研究会(沿岸海洋研究会、海洋生物学研究会、海洋環境問題研究会、教育問題研究会、プレクスルー研究会)、1つの支部(西南支部)が常設され、本会における重要かつ推進すべき課題に特化して活動を行っています。

常設の委員会などの他に、必要に応じてワーキンググループを中心とした活動も行っています。2011年3月に発生した東日本大震災の際には、幹事全員に加え、対応に必要な専門性を持つ会員からなる「震災対応ワーキンググループ(以下、震災対応WG)」を翌4月に組織し、学会としての取り組みや情報を発信しました。この震災対応WGからは、すでに3つの提案書と2つの報告書が発行され、学会ウェブサイトでも公開されています。

若手会員向けの支援活動も積極的に行っています。毎年1回、夏季休暇の時期に若手会員の自主企画による2泊3日のセミナー形式で開催される「若手会」や、若手会員が他の大学や研究機関で研究発表を行う「武者修行セミナー」、若手会員が海外で開催される学会に積極的に参加できるように渡航費の一部を補助する事業など、学会から経済的支援を行っています。最近では、秋季大会期間中に若手会員と学会長・副会長との懇談会を設けるなどソフト面からも支援を行っており、学会として若手を育成し研究活動を促進することで、海洋科学の裾野を広げ、日本海洋学会のみならず将来の地球惑星科学全体を担う人材の育成を目指しています。

また、アウトリーチ活動の一環として、2016年から、小学校から高校、一般の方を対象とした「海の出前授業」を行っています。日本海洋学会会員による授業を通じて、海洋への興味を育ててもらえるよう尽力しております。

これらの事業活動の詳細については、過去のJOS ニュースレターに掲載されておりますので、是非ご覧ください。

### 5. 学会による表彰

日本海洋学会は、毎年、日本海洋学会賞(顕著な学術業績を挙げた会員を表彰)、岡田賞(顕著な学術業績を挙げた35歳以下の会員を表彰)、宇田賞(顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓

発や研究支援において功績のあった者など海洋学の発展に大きく貢献した会員を表彰)、日高論文賞(本学会の定期刊行物に発表された優れた論文を表彰)、奨励論文賞(本学会の定期刊行物に優れた論文を発表した若手会員を表彰)、環境科学賞(海洋環境保全に関連した学術研究・教育・啓発において功績のあった会員を表彰)の各賞を授与しています。特に、岡田賞および奨励論文賞は、若手会員への研究奨励を目的とした表彰です。これらに加えて、秋季大会では、若手会員の研究発表の中から、大会実行委員会による若手優秀発表賞の表彰も実施されています。

#### 6. 日本気象学会との今後の連携に向けて

日本海洋学会では、海洋物理学や海洋内部の物質循

環学の分野を中心に、同じく流体力学や地球流体力学を基盤とする日本気象学会の会員との連携を通じて、様々な研究活動が行われてきました。しかし、昨今では国連の持続可能な開発目標(SDGs)などにみられるように、より複雑で包括的な問題の解決が社会から要請されています。日本気象学会と日本海洋学会とが、今まで以上に連携の範囲を広げ、分野横断的な活動を行うことで、地球環境・地球科学に関わる広い分野の課題解決を実現していけるものと確信しております。是非、日本気象学会の皆様も、日本海洋学会秋季大会やJpGU大会での海洋関連セッションに足を運んで頂ければと思います。きっと新しい発見があるはずです。